

## スポーツ健康福祉学科学生を対象とした障がい者スポーツに対する意識調査

神田 潤一 正野 知基

Attitudes toward Sports for the Disable among University Students  
in a Department of Sports, Health and Welfare

Junichi KANDA, Tomoki SHONO

### Abstract

This study examined the awareness of and attitudes toward sports for the disabled and the Paralympics among university students majoring in a department of sports, health and welfare. The results indicated that both recognition of and interest in these activities were high. In fact, approximately 60% of the university students expressed interest in becoming directly involved with sports for the disabled or the Paralympics. The greatest expression of interest was displayed by those preparing to become trainers. This study suggests the need to develop the human resources to support sports for the disabled by enabling students preparing to become athletic trainers to collaborate with leaders of disabled sports training.

**Key words** : sports for the disabled, Paralympics, sports, welfare, university students

**キーワード** : 障がい者スポーツ, パラリンピック, スポーツ, 福祉, 大学生

### 緒言

我が国の障がい者スポーツはパラリンピックをきっかけとして発展してきた(公益財団法人日本障がい者スポーツ協会, 2015)。1964年東京オリンピック競技大会終了後に行われた東京パラリンピック競技大会が契機となり, その翌年に身体障がい者スポーツの普及・振興を図る統括組織として財団法人日本身体障害者スポーツ協会が設立された。さらに同年, 国民体育大会後に行われることとなった全国身体障害者スポーツ大会の開催へとつながった。全国身体障害者スポーツ大会はその後, 1992年から開催されている全国知的障害者スポーツ大会と2001年に合併し, 全国障害者スポーツ大会と名称を変え国内最大級の大会として現在も国民体育大会後に行われている。この日本身体障害者スポーツ協会と全国身体障害者スポーツ大会が日本における障がい者スポーツを

牽引する中核となった(蘭, 2002)。日本において, 障がい者のスポーツが競技スポーツとして認知されるようになったのは1998年に開催された長野パラリンピック競技大会以降であった(辻ら, 2014; 日本パラリンピアンズ協会, 2008, 2010)。長野パラリンピック競技大会を契機に三障がい(身体障がい, 知的障がい, 精神障がい)すべてのスポーツ振興を統括する組織として, また国際舞台で活躍できる選手の育成・強化を担う統括組織としての位置づけの必要性が有識者会議で提言された。そこで, 翌年の1999年に財団法人日本身体障害者スポーツ協会を財団法人日本障害者スポーツ協会と改称し, 協会内部に日本パラリンピック委員会を設置した(公益財団法人日本障がい者スポーツ協会, 2015)。このような中, 2013年の国際オリンピック委員会の総会にて, 2020年東京オリンピック・パラリンピック大会の招致が決まった。自国開催となった過去の2大会をみると, 今後ますます

我が国の障がい者スポーツは発展していくことが予想される。

しかし、現状では解決しなければならない問題が多くあり、2020年東京パラリンピック競技大会が迫った中で、障がい者スポーツを取り巻く環境の整備は急務となっている。2014年4月よりパラリンピック競技を含む障がい者スポーツの所管は厚生労働省から文部科学省へと移管された。このことはパラリンピック競技もオリンピック競技と同等に強化に取り組んでいくことを示しているが、2008年北京パラリンピック競技大会以降にナショナルトレーニングセンターの設置や、オリンピック競技との組織統一を行い強化に取り組んでいる諸外国から大きな遅れをとっている状況が示されている(トップアスリートにおける強化・研究活動拠点の在り方についての調査研究に関する有識者会議, 2015)。パラリンピック選手の競技環境は経済面、練習場所、仕事との両立、コーチおよび指導者の不足などの面から十分に改善されているとは言えず、選手の負担感には変わらずにあるということが明らかになっている(日本パラリンピアンズ協会, 2008, 2010)。このように、障がい者スポーツの中でも最も支援を受けているはずのパラリンピック選手においても競技環境の整備が不十分であるということから、一般の障がい者がスポーツを行うための環境はさらに悪い状況であることが推測できる。施設設備などのハード面と指導員不足などのソフト面から、障がい者が安心してスポーツを楽しむことが出来る場が少ないことを多くの先行研究(井上ら, 2012; 藤田, 2003; 山本ら, 2006)が指摘している。

これまでの障がい者スポーツ発展の背景をみると、自国開催となった東京パラリンピック競技大会、長野パラリンピック競技大会での選手の活躍がテレビや新聞等のマスメディアを通じて多くの人々の目に触れ、関心を高めたことが大きな要因となっている。このことから、障がい者スポーツを取り巻く環境の整備を進めるためには、多くの人々が注目するパラリンピック競技大会を通して障がい者スポーツの認知度および関心度を向上させることが鍵となるのではないかと考えられる。これまでに、理学療法士養成校卒業生や体育専攻学生、非体育専攻学生、保健福祉系大学生、スポーツ系の講義を受講した学生に対するアンケート調査(井上ら, 2012; 澤江ら, 2008, 2010, 2011; 高戸ら, 2005a, 2005b; 永浜ら, 2011; 永浜, 2012, 2013; 保井ら, 2008, 2009)、小学生や社会福祉学科学生、産業情報学科学生に対する障がい者スポーツ体験前後でのアンケート調査(安井, 2004; 川田ら, 1999)、全国障害者スポーツ大会の開催県にて小・

中・高校生を対象とした大会前後でのアンケート調査(和久田ら, 2005)から、障がい者スポーツやアダプテッド・スポーツへの関心を高めるための方法や教育内容が検討されているが、体育・スポーツと福祉の両方を学んでいる学生に対しての検討はされていない。

そこで本研究では、スポーツと福祉の両方を学んでいる学生を対象として、障がい者スポーツおよびパラリンピックに対する認知度や意識レベルを調査し、障がい者スポーツに対する関心を高める効果的な教育内容について検討するための基礎的資料を得ることを目的とした。

## 方法

### 1. 調査対象および調査時期

九州保健福祉大学のスポーツ健康福祉学科1年生から4年生を対象とした。本研究の趣旨に同意しアンケートに回答した学生131名のうち、分析に支障のない質問項目で欠損値のあるもの12名を省いた。その結果、1年生38名(年齢 $18.6 \pm 0.5$ )、2年生28名(年齢 $19.7 \pm 1.2$ )、3年生29名(年齢 $20.4 \pm 0.5$ )、4年生24名(年齢 $21.5 \pm 0.5$ )の計119名を分析対象とした(表1)。調査は平成27年7月下旬に実施した。

表1 回答者の属性

学年	男子(人)	女子(人)	合計(人)
1年生	32	6	38
2年生	22	6	28
3年生	22	7	29
4年生	20	4	24
合計	96	93	119

### 2. 調査内容

アンケート調査の内容は、障がい者スポーツ(8項目)、パラリンピック(8項目)、障がいのある人との関わり方(3項目)、障がい者スポーツおよびパラリンピックへの関わり方(1項目)であった。なお、質問内容については、結果において記載した。

### 3. 分析方法

学年と各質問項目への回答の関連については $\chi^2$ 検定、障がい者スポーツとパラリンピックにおける回答(合計)の比率についてはMcNemarの拡張検定を用いた。有意差が認められた場合はさらに残差分析を行った。分析には、統計パッケージSPSS14.0J for Windowsを用いた。有意水準は5%未満とした。自由記述に関しては、同じあるいは類似した内容を整理した。

4. 倫理的配慮

研究内容およびそれに伴う問題点を口頭と文書によって説明したうえで、当該研究への参加について同意を求めた。研究参加は「自由意思」によるものであり、辞退しても不利益を被ることはないことを明記し、アンケート調査票の提出をもって同意とみなすことを口頭により説明した。なお、本研究は九州保健福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した。

結果

1. 障がい者スポーツおよびパラリンピック

1) 認知度

障がい者スポーツおよびパラリンピックの認知度について表2に示した。障がい者スポーツの認知度について、全体では95.8%であり、それに対してパラリンピックの認知度は100.0%であった。学年と回答には有意な関連は認められなかった。

表2 障がい者スポーツおよびパラリンピックの認知度

問	選択肢	1年生 n=38		2年生 n=28		3年生 n=29		4年生 n=24		合計 n=119	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
問2. 障がい者スポーツを知っていますか.	はい	34	89.5	27	96.4	29	100.0	24	100.0	114	95.8
	いいえ	4	10.5	1	3.6	0	0.0	0	0.0	5	4.2
問10. パラリンピックを知っていますか.	はい	38	100.0	28	100.0	29	100.0	24	100.0	119	100.0
	いいえ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0

表3 障がい者スポーツおよびパラリンピックへの関心度

問	選択肢	1年生 n=38		2年生 n=28		3年生 n=29		4年生 n=24		合計 n=119	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
問3. 障がい者スポーツに関心がありますか.	関心がある	9	23.7	6	21.4	10	34.5	8	33.3	33	27.7
	どちらかといえば関心がある	23	60.5	16	57.1	19	65.5	13	54.2	71	59.7
	どちらかといえば関心がない	6	15.8	5	17.9	0	0.0	2	8.3	13	10.9
	関心がない	0	0.0	1	3.6	0	0.0	1	4.2	2	1.7
問11. パラリンピックに関心がありますか.	関心がある	16	42.1	8	28.6	12	41.4	10	41.7	46	38.7
	どちらかといえば関心がある	16	42.1	16	57.1	11	37.9	11	45.8	54	45.4
	どちらかといえば関心がない	5	13.2	4	14.3	5	17.2	3	12.5	17	14.3
	関心がない	1	2.6	0	0.0	1	3.4	0	0.0	2	1.7

問3 :  $\chi^2=9.671$ , df=9, ns  
 問11 :  $\chi^2=4.147$ , df=9, ns

表4 障がい者スポーツおよびパラリンピックへの観戦意識

問	選択肢	1年生 n=38		2年生 n=28		3年生 n=29		4年生 n=24		合計 n=119	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
問4. 障がい者スポーツを観てみたいですか.	そう思う	12	31.6	10	35.7	16	55.2	9	37.5	47	39.5
	どちらかといえばそう思う	21	55.3	12	42.9	11	37.9	11	45.8	55	46.2
	どちらかといえばそう思わない	4	10.5	6	21.4	2	6.9	3	12.5	15	12.6
	そう思わない	1	2.6	0	0.0	0	0.0	1	4.2	2	1.7
問12. パラリンピックを観てみたいですか.	そう思う	21	55.3	9	32.1	15	51.7	15	62.5	60	50.4
	どちらかといえばそう思う	13	34.2	15	53.6	9	31.0	8	33.3	45	37.8
	どちらかといえばそう思わない	3	7.9	4	14.3	5	17.2	1	4.2	13	10.9
	そう思わない	1	2.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.8

問4 :  $\chi^2=8.360$ , df=9, ns  
 問12 :  $\chi^2=9.988$ , df=9, ns

2) 関心度

関心度について表3に示した。全体では、障がい者スポーツにおいて「関心がある」が27.7%、「どちらかといえば関心がある」が59.7%、「どちらかといえば関心がない」が10.9%、「関心がない」が1.7%という結果になった。パラリンピックにおいては、「関心がある」が38.7%、「どちらかといえば関心がある」が45.4%、「どちらかといえば関心がない」が14.3%、「関心がない」が1.7%という結果になった。学年と回答には有意な関連は認められなかった。また、障がい者スポーツとパラリンピックにおける回答の比率についても有意差は認められなかった ( $\chi^2=10.800$ , df=6, ns)。

3) 観戦への興味および観戦方法

観戦への興味について表4に示した。全体では、障がい者スポーツでは「そう思う」が39.5%、「どちらかといえばそう思う」が46.2%、「どちらかといえばそう思わない」が12.6%、「そう思わない」が1.7%であった。パラリンピックについては「そう思う」が50.4%、「どちらかと

いえばそう思う」が37.8%, 「どちらかといえばそう思わない」が10.9%, 「そう思わない」が0.8%であった。学年と回答には有意な関連は認められなかった。

「そう思う」, 「どちらかといえばそう思う」と回答した学生に対しての希望の観戦方法を複数回答にて質問した結果を図1に示した。障がい者スポーツでは直接観戦(競技場など)が72人, テレビ・DVDなどが24人, 新聞・雑誌が5人, その他が1人であった。パラリンピックでは直接観戦(競技場など)が65人, テレビ・DVDなどが40人, 新聞・雑誌およびその他が0人であった。学年と回答には有意な関連は認められなかった。また, 障がい者スポーツとパラリンピックにおける回答の比率についても有意差は認められなかった( $\chi^2=8.411$ ,  $df=4$ , ns)。

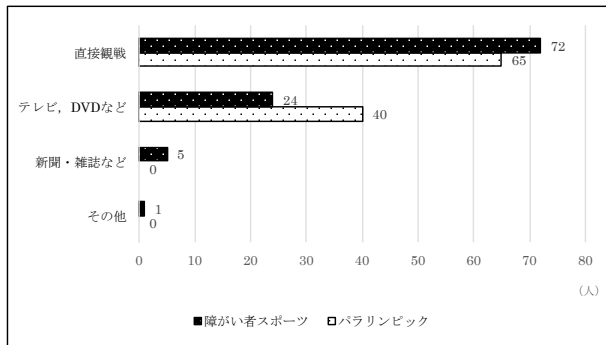


図1 希望観戦方法(複数回答)

4) 観戦経験

観戦経験の結果について表5に示した。全体では, 観戦経験があると回答した学生は, 障がい者スポーツでは52.1%であった。学年と回答に有意な関連が認められ,

表5 障がい者スポーツおよびパラリンピックの観戦経験

問	選択肢	1年生 n=38		2年生 n=28		3年生 n=29		4年生 n=24		合計 n=119	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
問6. 障がい者スポーツを観たことがありますか.	はい	17	44.7	13	46.4	10	34.5	22	91.7	62	52.1
	いいえ	21	55.3	15	53.6	19	65.5	2	8.3	57	47.9
問14. パラリンピックを観たことがありますか.	はい	17	44.7	13	46.4	15	51.7	16	66.7	61	51.3
	いいえ	21	55.3	15	53.6	14	48.3	8	33.3	58	48.7

問6:  $\chi^2=19.849$ ,  $df=3$ ,  $p<.001$   
 問14:  $\chi^2=3.191$ ,  $df=3$ , ns

表6 障がい者スポーツおよびパラリンピックへの関わり意識

問	選択肢	1年生 n=38		2年生 n=28		3年生 n=29		4年生 n=24		合計 n=119	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
問8. 障がい者スポーツに直接関わりたいですか.	そう思う	8	21.1	1	3.6	2	6.9	2	8.3	14	11.8
	どちらかといえばそう思う	18	47.4	14	50.0	13	44.8	10	41.7	56	47.1
	どちらかといえばそう思わない	10	26.3	9	32.1	10	34.5	9	37.5	38	31.9
	そう思わない	2	5.3	2	7.1	4	13.8	3	12.5	11	9.2
問16. パラリンピックに直接関わりたいですか.	そう思う	9	23.7	2	7.1	6	20.7	4	16.7	21	17.6
	どちらかといえばそう思う	16	42.1	15	53.6	12	41.4	8	33.3	51	42.9
	どちらかといえばそう思わない	10	26.3	10	35.7	7	24.1	8	33.3	35	29.4
	そう思わない	3	7.9	1	3.6	4	13.8	4	16.7	12	10.1

問8:  $\chi^2=6.929$ ,  $df=9$ , ns  
 問16:  $\chi^2=7.665$ ,  $df=9$ , ns

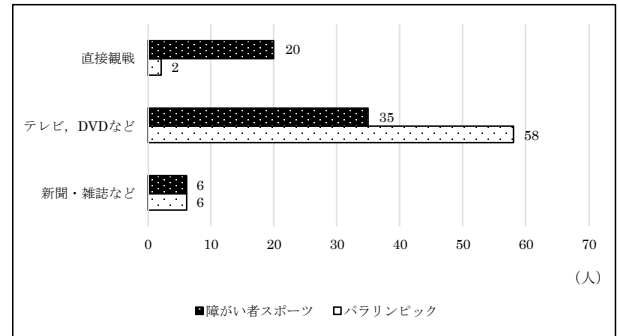


図2 観戦経験有りの学生の観戦方法(複数回答)

2年生 ( $p<.01$ ) と3年生 ( $p<.05$ ) では低く, 4年生 ( $p<.01$ ) は高い値を示した。パラリンピックでは51.3%であり, 学年と回答には有意な関連は認められなかった。また, 障がい者スポーツとパラリンピックにおける回答の比率に有意差は認められなかった。

観戦経験有りと回答した学生の観戦方法を図2に示した。障がい者スポーツでは直接観戦が20人, テレビ・DVDが35人, 新聞雑誌が6人となった。パラリンピックでは直接観戦が2人, テレビ・DVDが58人, 新聞・雑誌が6人となった。

5) 関わり意識

直接関わりたいかどうかの結果を表6に示した。全体的にみると, 障がい者スポーツでは「そう思う」が11.8%, 「どちらかといえばそう思う」が47.1%, 「どちらかといえばそう思わない」が31.9%, 「そう思わない」が9.2%であった。パラリンピックについては「そう思う」が17.6%, 「どちらかといえばそう思う」が42.9%, 「どちらかといえばそう思わない」が29.4%, 「そう思わない」



が10.1%であった。学年と回答には有意な関連は認められなかった。また、障がい者スポーツとパラリンピックにおける回答の比率についても有意差は認められなかった ( $\chi^2=5.923$ ,  $df=5$ , ns)。

「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した学生に、どのような立場に関わりたいか複数回答にて質問したところ、障がい者スポーツとパラリンピック共にトレーナー、大会役員、コーチ、マネージャー、審判の順に高い値を示した(図3)。

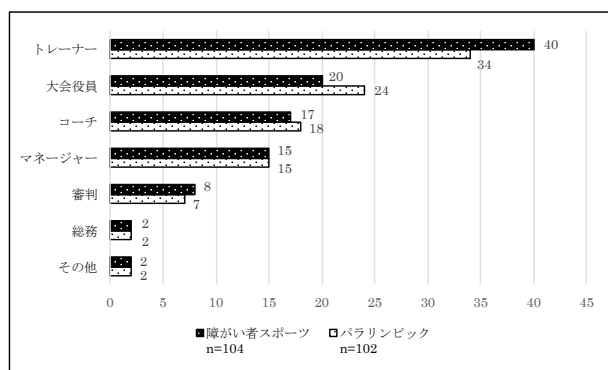


図3 関わりたい立場

## 2. 障がいがある人との関わりについて

### 1) 関わりの有無

障がいのある人との関わりの有無について表7に示した。全体的にみると「はい」と回答した学生が73.1%、「いいえ」と回答した学生が26.9%となった。学年と回答に有意な関連が認められ、1年生 ( $p<.01$ ) では低く、3年生 ( $p<.05$ ) と4年生 ( $p<.01$ ) で高い値を示した。

### 2) 時期

障害がある人と関わったことがあると回答した87人に、関わった時期について聞いた結果を図4に示した。

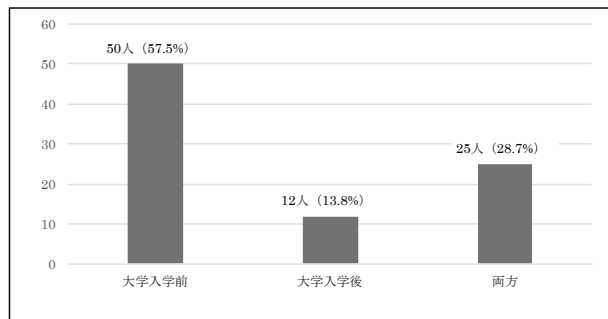


図4 障がいがある人と関わった時期

表7 障がいがある人との関わりの有無

問	選択肢	1年生 n=38		2年生 n=28		3年生 n=29		4年生 n=24		合計 n=119	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
問18. 障がいがある人に関わったことがありますか。	はい	21	55.3	17	60.7	26	89.7	23	95.8	87	73.1
	いいえ	17	44.7	11	39.3	3	10.3	1	4.2	32	26.9

$\chi^2=18.686$ ,  $df=3$ ,  $p<.001$

大学入学前が57.5%、大学入学後が13.8%、両方が28.7%であった。

### 3) 具体的にどのような関わりをもったか

障害がある人と関わったことがあると回答した87人に、具体的にどのような関わりをもったかを自由記述にて回答させた。本研究では、家族・親戚、学校での友達、実習・ボランティア、その他の4項目に分類した結果を表8に示した。

表8 障がい者との関わり方

項目	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
実習・ボランティア	5	4	14	10	33
学校の友人関係	6	8	11	7	32
家族・親戚	1	2	1	4	8
その他	7	3	4	6	20

### 3. 障がい者スポーツに関わる上で大切なこと

障がい者スポーツに関わる上で大切なことを自由記述で回答させた。本研究では、澤江ら(2008)の研究を参考に、「障がい者スポーツの特性を理解した上で関わる」などの理解重視タイプ、「同じ人として、同等な立場となって関わるのが大事」などの平等重視タイプ、「障がいがあってもみんなと同じように楽しみながらスポーツできる」などの楽しさ重視タイプ、「選手がケガしないようなサポートが大切」などの安全重視タイプ、「相手の気持ちを考える」などの共感重視タイプ、「障がい者の方々が最大限にパフォーマンスを発揮できる場面を作り出す努力をする」などの挑戦重視タイプ、その他の7つのタイプに分けて分類した結果を表9に示した。

表9 障がい者スポーツに関わる上で大切なこと

※割合 (%) は全回答数を母数として算出

項目	合計	%
平等重視タイプ	32	25.4%
理解重視タイプ	31	24.6%
共感重視タイプ	22	17.5%
安全重視タイプ	8	6.3%
挑戦重視タイプ	7	5.6%
楽しさ重視タイプ	6	4.8%
その他	20	15.9%

n=126

## 考察

### 1. 障がい者スポーツとパラリンピック

#### 1) 認知度

経営学部、経済学部、商学部、人間科学部、ネットワーク情報学部、文学部、法学部の学生を対象とした調査(永浜, 2013)では、障がい者スポーツを知っている大学生は184名中165名と全体の89.7%であった。また、全国障害者スポーツ大会の開催県にて小・中・高校生3989名を対象としたアンケート調査(和久田ら, 2005)によると、パラリンピックについて「知っている」が69.1%であった。本調査での認知度は、障がい者スポーツが95.8%、パラリンピックは100.0%であり、本学スポーツ健康福祉学科学生の認知度が非常に高いことを示している。また、学年による差異がなかったことから、元々障がい者スポーツおよびパラリンピックを知っている学生が入学してきていることが示唆された。本研究では、いつ、どのように認知したかについては質問していないため詳細については不明である。近年、東京パラリンピックに関連した情報や車いすテニス選手をはじめとした日本人選手の国際的な活躍など、障がい者スポーツがメディアに取り上げられることが多くなってきている。このように障がい者スポーツに関連した情報が多くの人々の耳目に触れることによって、一般的な認知度が今後より一層高くなっていくことが予想される。

#### 2) 関心度

小・中・高校生3986名を対象としたアンケート調査(和久田ら, 2005)によると、障がい者スポーツに「興味がある」が6.7%、「少し興味がある」が40.1%、「あまり興味がない」が41.7%、「全く興味がない」が11.5%であった。対象年齢と選択肢の言葉が異なるため単純に比較はできないが、本調査では障がい者スポーツに「関心がある」が27.7%、「どちらかといえば関心がある」が59.7%と肯定的な回答が87.4%を占め、本学スポーツ健康福祉学科学生の障がい者スポーツに対する関心度が高いことが示唆された。また、障がい者スポーツに対して、社会福祉学科と産業情報学科を比較した研究(川田ら, 1999)によると、社会福祉学部の方が肯定的な傾向になることが示唆されている。澤江ら(2011)は、スポーツと障がいの両方を含めた関心ルートを構成することは意義があるとしている。本学スポーツ健康福祉学科では、スポーツと社会福祉のどちらの分野も共に学んでいることが、障がい者スポーツに対する学生の高い関心度の一因となっているものと考えられる。

### 3) 観戦への興味および観戦方法

観戦への興味については、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の肯定的な回答が障がい者スポーツでは85.7%、パラリンピックでは88.2%と、共に8割以上と高い値を示した。障がい者スポーツについては「どちらかと言えばそう思う」の割合が高かったが、パラリンピックでは「そう思う」と回答した割合が高くなっていった。このことから、本学科の学生は、より競技性の高いパラリンピックの方が、観戦への興味が高まることが示唆された。

観戦方法に関しては、障がい者スポーツとパラリンピック共に直接観戦が一番高い値を示し、次いでテレビ・DVDなどであった。このことから、本学スポーツ健康福祉学科学生では、直接観戦できるような実習やDVDなどの映像を中心とした授業内容を行うことにより、障がい者スポーツへの関心度がより高まる可能性が示唆された。

### 4) 観戦経験

障がい者スポーツおよびパラリンピック共に、約半数の学生に観戦の経験があった。観戦方法に関しては、障がい者スポーツでは直接観戦が約3割という結果となった。パラリンピックに関しては、1998年の長野パラリンピック競技大会以降、国内では開催されていないので、8割以上の学生がテレビ・DVDなどの映像での観戦となっていた。本研究では、観戦した時期や理由などについては質問していないため詳細については不明である。観戦の動機を把握することが、障がい者スポーツへの関心を高める方策を考える一助となる可能性もあるため、今後の課題としたい。

### 5) 関わり意識

直接関わりたいかどうかについては、障がい者スポーツでは「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の肯定的な回答が58.9%、パラリンピックでは肯定的な回答が60.5%と、共に約6割の学生が関わりたいと回答した。

肯定的な意見を示した学生に、どのような立場で関わりたいか質問したところ、トレーナーと回答した学生が一番多い結果となった。本学科では2013年度入学生よりアスレティックトレーナー養成を開始したが、障がい者スポーツ選手をサポートするような体制は整えていない。障がい者スポーツ選手をトレーナーとしてサポートするためには、障がい者スポーツの特性を理解した上で、専門的な知識や技術も必要になってくる。今後、学生のニーズに応えるためにも、学科開設当初より行っている

指導者を養成する障害者スポーツ指導者(初級)のカリキュラムとの連携を図り、幅広く障がい者スポーツを支える人材の養成について検討・実施していく必要がある。

## 2. 障がいがある人との関わりについて

障がいがある人と関わったことがあると答えた学生は約7割であった。学年別にみると、3年生と4年生の割合が多かった。これは、大学内の講義や実習の影響ではないかと考えたが、関わったことがあると回答した学生のうち86.2%が大学入学前に関わっていた。どのような関わりをもったかは、主に学校の友人関係、実習・ボランティアと回答している学生が多く、大学入学前における関わりが大きいことが示唆された。大学入学後についてみていくためには、3年生と4年生と比較して割合の少なかった1年生と2年生の追跡調査が必要であろう。

## 3. 障がい者スポーツに関わる上で大切なこと

体育学を専攻する学生を対象とした研究(澤江ら, 2008)と比較すると、本研究では、平等重視タイプと共感重視タイプが多い傾向にあった。また、理解重視タイプは少し低い傾向にあった。このことは、体育学のみを専攻するよりも、同時に福祉も専攻する本学スポーツ健康福祉学科学生が、平等や共感することを大事に考えている可能性が示唆された。しかし、本研究では質問項目などに不十分な点が多く、澤江ら(2008)の研究と単純に比較することはできないため、今後さらなる検討が必要である。

## まとめ

本研究は、本学スポーツ健康福祉学科学生を対象として、障がい者スポーツおよびパラリンピックに対する認知度や意識レベルを調査し、障がい者スポーツに対する関心を高める効果的な教育内容について検討するための基礎的資料を得ることを目的とした。その結果、障がい者スポーツおよびパラリンピック共に認知度、関心度が高く、観戦への興味も高い値を示した。希望の観戦方法に関しては、直接観戦が最も多かった。観戦経験については、障がい者スポーツとパラリンピックともに約半数の学生が経験しており、実際の観戦方法は共にテレビ・DVDなどの映像が最も多かった。障がい者スポーツに関しては、直接観戦が3割近い値だった。直接関わりたいかどうかに関しては共に約6割の学生が関わりたいと回答し、関わりたい立場としてはトレーナーが最も多かった。今後、指導者養成とアスレティックトレーナー

養成の連携を図り、幅広く障がい者スポーツを支える人材の養成について検討・実施していく必要がある。

## 引用文献

- 藤田紀昭(2003) 身体障害者施設における運動・スポーツの実施状況に関する調査研究-障害者に対する運動・スポーツプログラム普及のための基礎的資料. 障害者スポーツ科学, 1, 64-72.
- 保井俊英・永田隆子・濱屋桃子ほか(2008)「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて-障害者スポーツ中級スポーツ指導員資格取得に結びつけるためには-. 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学), 56, 127-131.
- 保井俊英・永田隆子・三上真二(2009)「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて(2)-2年分の調査から-. 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学), 57, 75-81.
- 井上由里・廣岡幸峰・十田朋也(2012) 障害者スポーツに関する意識調査の結果. 神戸国際大学紀要, 82, 83-89.
- 川田公仁・山本哲也(1999) 大学体育の授業における障害者スポーツの試みーシッティングバレーボールを用いて. つくば国際大学研究紀要, 5, 111-122.
- 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会(2015) 障がい者スポーツの歴史と現状. ([http://www.jsad.or.jp/about/pdf/jsad\\_ss\\_2015\\_web\\_150410.pdf](http://www.jsad.or.jp/about/pdf/jsad_ss_2015_web_150410.pdf))
- 永浜明子・藤村弘子(2011) アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告(第I報)ーアダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から. 大阪教育大学紀要 第V部門, 1, 39-49.
- 永浜明子(2012) アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告(第II報)ーアダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から. 大阪教育大学紀要 第V部門, 60(2), 31-44.
- 永浜明子(2013)「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベルーアダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から(第III報). 大阪教育大学紀要 第V部門, 61(2), 47-60.
- 日本パラリンピアンズ協会(2008) パラリンピック選手の競技環境 その意識と実態調査 報告書. (<http://www.paralympians.jp/資料-報告書/第1回-パラリンピック選手の競技環境-その意識と実態調査/>)
- 日本パラリンピアンズ協会(2010) 第2回 パラリンピック

- ク選手の競技環境 その意識と実態調査 報告書.  
(<http://www.paralympians.jp/資料-報告書/第2回-パラリンピック選手の競技環境-その意識と実態調査-1/>)
- 蘭和真 (2002) 東京パラリンピック大会と障害者スポーツ. 東海女子大学紀要, 22, 13-23.
- 澤江幸則・齊藤まゆみ (2008) 障害のある子どもの運動活動への関心に関する基礎的調査研究. 筑波大学体育科学系紀要, 31, 131 - 140.
- 澤江幸則・齊藤まゆみ (2010) 「障害のある子どものための身体活動」への関心についての研究 - 障がいに関する知識との関連に着目して -. 筑波大学体育科学系紀要, 33, 87 - 98.
- 澤江幸則・齊藤まゆみ・柄田毅ほか (2011) 体育専攻学生のアダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容について～非体育専攻学生との比較を通して～. 障害者スポーツ科学, 9 (1), 35 - 45.
- 高戸仁郎・木田春彦・植木章三 (2005a) 保健福祉系大学生の障害者スポーツに対する意識の変容 (第一報). 第27回医療体育研究会／第10回アジア障害者体育・スポーツ学会日本部会 第8回合同大会抄録集, 27.
- 高戸仁郎・木田春彦・植木章三 (2005b) 保健福祉系大学生の障害者スポーツに対する意識の変容 (第二報). 第28回医療体育研究会／第11回日本アダプテッド体育・スポーツ学会 第9回合同大会抄録集, 25.
- 辻はるか・上地勝 (2014) 日本におけるパラリンピックに関する報道の内容分析. 茨城大学教育学部紀要 教育科学, 63, 499 - 508.
- トップアスリートにおける強化・研究活動拠点の在り方についての調査研究に関する有識者会議 (2015) トップアスリートにおける強化・研究活動拠点の在り方について～オリンピック競技とパラリンピック競技の一体的な拠点構築に向けて～【最終報告】. ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/023/gaiyou/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/26/1354533\\_1\\_1.pdf#search='%E3%83%88%E3%83%83%E3%83%97%E3%82%A2%E3%82%B9%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%88%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B+%E6%9C%80%E7%B5%82%E5%A0%B1%E5%91%8A'](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/023/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2015/01/26/1354533_1_1.pdf#search='%E3%83%88%E3%83%83%E3%83%97%E3%82%A2%E3%82%B9%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%88%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B+%E6%9C%80%E7%B5%82%E5%A0%B1%E5%91%8A'))
- 山本佳代子・稲木光晴 (2006) 我が国における障害者のスポーツについての一考察. 西南女学院大学紀要, 10, 57 - 64.
- 安井友康 (2004) 車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響. 障害者スポーツ科学, 2 (1), 25 - 30.
- 和久田佳代・石塚和重 (2005) 全国障害者スポーツ大会が障害者スポーツへの認知度や意識に及ぼす影響. 聖隷クリストファー大学 社会福祉学部紀要, 3, 69 - 78.